



演奏生活65周年 卒寿記念公演

舘野 泉

ピアノ・リサイタル

IZUMI TATENO PIANO RECITAL 2025
ALL WORKS DEDICATED TO IZUMI TATENO

演奏生活65周年 卒寿記念公演

舘野 泉ピアノ・リサイタル

2025年11月2日(日) 14:00開演 サントリーホール

IZUMI TATENO PIANO RECITAL 2025

ALL WORKS DEDICATED TO IZUMI TATENO

2:00 P.M., SUNDAY, NOVEMBER 2, 2025 AT SUNTORY HALL

主催: ジャパン・アーツ

後援: フィンランド大使館 協力: 舘野泉ファンクラブ

彼の音楽を彼が弾く

PROGRAM

T. マグヌッソン: 組曲『アイスランドの風景』(2013) ♪

Thordur Magnusson (1973-): Scenes of Iceland – for piano (left hand) à Izumi Tateno (2013)

第1楽章 アンダンテ「東の方の小さな川の滝」

I movement: Andante. “Waterfall in the small brook in the east”

第2楽章 モデラート「鳥の目から見た景色」

II movement: Moderato. “Highlands seen with bird's eye”

第3楽章 アレグレット「オーロラの輝き」

III movement: Allegretto. “Dance of the northern lights”

第4楽章 アダージョ「いつまでも明るい夏の夜」

IV movement: Adagio. “Calm moment, in a bright light night at the midnight summer solstice”

第5楽章 アダージョ「大河ラーガルフリオウトのほとりを歩く」

V movement: Adagio. “Walk by the great river of Lagarfljót”

*タイトル訳: 舘野泉

P. H. ノルドグレン: 小泉八雲の『怪談』によせるバラードII Op.127(2004)

Pehr Henrik Nordgren (1944-2008): Kwaidan II, Three Piano Ballads to Japanese Ghost Stories by

Lafcadio Hearn, for Left Hand Alone Op.127 (2004)

「振袖火事」 “Furisodekaji”

「衝立の女」 “Tsuitate-no-onna”

「忠五郎の話」 “Chugoro-no-hanashi”

J. ティエンスー: EGEIRO「復活」(2013) ♪

Jukka Tiensuu (1948-): EGEIRO (2013) for piano (left hand)

P. エスカンデ: 奔放なカプリッチョ ～ピアノと管楽器のための(2023) ♪

Pablo Escande (1971-): Capricci Stravaganti – for Piano Left Hand and Wind Ensemble (2023)

*すべて舘野泉に捧げられた作品です。♪舘野泉左手の文庫(基金)助成作品

Program: All works dedicated to Izumi Tateno

共演 平石章人 Almito Hiraishi (指揮, Conductor)

甲斐雅之 Masayuki Kai (フルート, Flute)

辻本憲一 Kenichi Tsujimoto (トランペット, Trumpet)

伊藤 駿 Shun Ito (トランペット, Trumpet)

新田幹男 Mikio Nitta (トロンボーン, Trombone)

ザッカリー・ガイルス Zachary Guiles (トロンボーン, Trombone)

野々下興一 Koichi Nonoshita (バストロンボーン, Bass trombone)

齋藤 充 Mitsuru Saito (ユーフォニアム, Euphonium)



ごあいさつ

卒寿になった。人生90年、思えば長い旅をしてきたものだ。

ピアノを弾くことが人生そのものだった。年輪のようにそれは自分の中に深く刻まれている。世界中の作曲家が曲を書いてくれた。年輪を愛しむように共に生きてきた。今回演奏させていただく作品も皆そうである。

アイスランドを初めて訪れたのはインドの演奏旅行への2年ぐらい後だったから、今から43年前だったろうか。首都レイキャヴィクの空港に降り立った時、火星にでもついたのかと思った。樹も草もなく火山の溶岩台地のような荒涼とした風景が広がっていた。間歇泉や山の奥の壮大な滝を見に歩いたが、自然が大きく呼吸をし動いているようであった。

マグヌッソンの「アイスランドの風景」は音の数も少なく、孤独な音楽である。しかしその孤独をあるがままに受け入れ、自然と共に歩む音楽は美しい。終曲では時を超えた緩やかで何もない歩みが祈りのようにさえ思えてくる。

ノルドグレンがこの世を去ってから既に20年近い。彼の作品を演奏し続けて50年。その音楽を弾くたびに湧き上がる生命の力を身に覚え、私もまた生きていく。彼の「語り部」になったと強く思うのである。彼が書いたピアノ曲はすべてラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の「怪談」をもとにしているが、それらはすべて人の心の奥底に潜む情念や怨念、懷疑、愛しみなどである。

ティエンスーは自作の言葉による説明を一切拒否する。私も彼の音楽に関しては同感である。その音楽は鮮烈無比。そこに言葉はいらない。私自身もあらゆる音楽と対する時は純粋に音だけの世界である。音がひとつ動くだけで苦悩と歓喜が背中合わせになっている。天国と地獄が実は隣り同士なのだ。

エスカンデには、この10年ほど毎年新作を委嘱している。今年はラヴェルの生誕150年。ラヴェルに“Le Tombeau de Couperin(クーペランの墓)”というピアノ組曲があるが、“Le Tombeaux de Maurice Ravel”(仮題)という曲を、エスカンデに書いてもらっている。来年の3月に、世界初演する予定だ。ラヴェルに対する深い感謝と賛嘆の想いを込めてだ。ラヴェルの左手のピアノ協奏曲は、最大の難曲のように言われているが、彼の他の作品と同様、あれほど自然で優しい(易しいではない!)音楽はないのだ。本当の意味で職人なのだ。

卒寿になって、サントリーホールでたくさんの方々の前で演奏をし、聴いていただけるなんて幸せなことは、想像もしていなかった。感謝しかない。大きな会場でするリサイタルはこれが最後かもしれないし、引退というのもひとつのあり方だろう。しかし生命の炎はまだ燃えているのだ。人生枯淡の境地なんて嘘八百。歳とともに色彩はより豊かに力強く光は明晰になっている。音楽と生きていくことこそ己が人生。どこまでできるかは“神の味噌汁”であるが、来年も弾くことがいっぱい!

また聴いてください。

舘野 泉



▼Amazonはこちらよりアクセスできます



ご購入は、全国の書店、各ネット販売、静風社にて。

卒寿を祝して、心よりお喜び申し上げます

フィンランドで出版された話題の評伝、好評発売中!

『奇跡のピアニスト 舘野泉』

サリ・ラウティオ 著 舘野 泉 監修 五十嵐 洋 訳

卒寿を迎えた今も人々を魅了し続けるピアニスト舘野泉。生い立ちから現在までのこれまで語られなかったエピソードを数多く掲載。日本を代表する作曲家、フィンランドの名匠らへのインタビューも収録。真の巨匠の魅力に迫る。

A5判 320頁 定価: 3,300円(税込)

ISBN 978-4-910731-02-5

発行: みずいるブックス 発売: (株) 静風社

電話: 03-6261-2661 mail: info@seifusha.co.jp

■ マグヌッソン:組曲『アイスランドの風景』(2013)

ソールデュル・マグヌッソン(1973-)は、アイスランドのレイキャヴィク生まれの作曲家。2004年、最初の交響曲でアイスランド音楽賞・年間最優秀クラシック音楽作品部門を受賞した。作品はスカンディナヴィア諸国をはじめ、アメリカ、フランス、日本などで広く演奏されている。

『アイスランドの風景』は館野泉に委嘱された曲であり、彼に献呈される。2013年の3月から4月にかけて作曲された。5楽章からなるこの組曲は、ほぼすべての楽章が共通の旋律でつながっている。それぞれの楽章は、アイスランドの自然の中にある時、場所、気分に触発されたものである。アイスランドの自然は、人生を通して私にきわめて強い印象を与えてきた。それは感情という形に表現することができるほど、懐かしい思い出として心に鮮明に残っている。私はその感情をこの5つの曲の中に表現しようと思う。(マグヌッソン)

■ ノルドグレン:小泉八雲の『怪談』によせるバラードⅡ Op.127 (2004)

日本の文部省給費留学生として1970年〜73年大阪や東京に滞在した経験を持つフィンランドの作曲家ペール・ヘンリック・ノルドグレン(1944-2008)は、独特の情感をもつ『10曲の怪談によるバラード』をはじめ、これまで館野泉の依頼で数多くのピアノ曲を作曲している。

このバラードⅡは、館野泉の演奏復帰にあたり左手のための新しい怪談として委嘱されたもので、“恋情”をキーワードに、不思議で謎めいた3つの話(「振袖火事」「衝立の女」「忠五郎の話」)が音楽として表現されている。

「振袖火事」

裕福な商人の娘が美しい若侍に一目惚れし、恋患いのあげく死んでしまう。娘の残した振袖は寺に寄進され、その後、町の娘たちの手を転々とするが、その振袖を手に入れた娘は次々に亡くなってしまう。ついに坊さんが、この振袖には呪いがかかっていると気づき、振袖を燃やさせる。燃え盛る炎の中から祈祷の文字が現れ、火は寺に燃え移り、ついには江戸の町が大火に見舞われた。これを世に言う振袖火事(1657年)という。

「衝立の女」

京都の室町に住む篤敬^{とつげい}という若い学者が、骨董屋でみつけた衝立に描れた美しい娘に恋をする。娘の絵を見るごとに望みのない恋心はつるばかり。叶えられない恋ならば、もはや生きていても仕方がないと思い悩んでいたところ、知人に昔の絵にまつわる奇怪なことを知る賢い老人が

いて、「絵の娘に名前を与え、毎日辛抱強く絵の前でその名を呼び続ければ、いつか必ずや返事があるだろう。そのとき百軒の酒屋から買ってきた酒を献杯しなされ。」と勧められる。篤敬は、遂に絵を抜け出てきた娘と七代の契りを誓い合う。娘が描かれていた衝立は、いつまでも空白のままだった。

「忠五郎の話」

ある旗本に忠義深く仕える足軽・忠五郎には、毎夜邸をぬけ朝日が昇る前に戻るという人知れぬ秘密があった。彼は橋の袂にたたずむ高貴で魅惑的な女に誘われ水中の宮殿で婚礼を行ったが、妻は夫に2人のことは決して他言せぬよう言い渡す。しかし、不審に思った足軽仲間に、忠五郎はある日とうとう秘密をばらしてしまう。その夜、いつものように橋の袂を訪ねるが妻の姿はもうなく、忠五郎は病に倒れ、医者は彼が死病に冒されていることを告げる。女は忠五郎の生血を吸い、彼は水分だけの屍のようになっていたのである。美しい女とは、実は大きな醜い蝦蟇蛙だった…。

■ ティエンスー:「復活」(2013)

ユッカ・ティエンスー(1948-)はフィンランドを代表する作曲家にしてチェンバロ奏者。常に新しい音楽への可能性を探求する作風は、どれも極めて刺激的である。ヘルシンキのシベリウス・アカデミーおよびパリのIRCAMで教鞭を執る。

原題のEGEIRO(エゲイロー)は、古代ギリシャ語で「復活」を意味する。「館野泉左手の文庫」の委嘱により、著名なピアニスト館野泉のために作曲。音楽と聴衆の間には、どんな言葉が介在しても役立つより邪魔物になる。それよりも私は、館野泉の魔法の指を通して、音楽自身が語るにまかせたいと思う。(ティエンスー)

■ エスカンデ:奔放なカプリッチョ 〜ピアノと管楽器のための(2023)

パブロ・エスカンデ(1971-)はアルゼンチン生まれの作曲家で、2012年より日本在住。これまで、館野泉の左手のためにソロ・室内楽・協奏曲を献呈してきた。

館野氏から最初に作曲の依頼を頂いたのは、2002年11月のことだった。これまで館野氏に委嘱された作品は全部で12曲、どれも私にとって素晴らしい作曲の経験となった。毎回異なる編成での作曲が、新たな発見やチャレンジとなった。今回はヤナーチェクのカプリッチョと同じ編成(特殊な編成だ!)で書くことを条件として依頼された。そして、ヤナーチェクの作品は非常に難解であるため、新

しい生命の喜び、力と歓喜に溢れた曲を書いて欲しいと言われた。私はヤナーチェクのカプリッチョを何度も繰り返し聴き、自作で何ができるのかを熟考した。

2002年より館野氏が世界各地の様々な作曲家に数多の依頼をしてからは、少なかった左手のピアノのためのレパートリーが大変豊富になった。館野氏の偉業は作曲家、左手のピアニスト、学生、音楽学者、出版社などにとって大きな発展をもたらした。作曲家として館野氏に改めて感謝の意を表したい。

本日、この「奔放なカプリッチョ」を聴衆も演奏者も心から楽しんでいただけることを願っている。
(エスカンデ)

「奔放なカプリッチョ」は短い導入と4つのカプリッチョで構成されている。それぞれのカプリッチョはピアノのカデンツにより区切られ、全体が合わせ鏡のようになっていて、中心には一番長い2番目のカデンツが置かれている。それぞれのカプリッチョは形式も性格もテンポも編成も異なり、唯一ピアノのカデンツで特有のテーマが繰り返される。カデンツの終わりで、次に続くカプリッチョの雰囲気や新しいテンポを導いていく。

導入：カプリッチョ1に属している。金管楽器奏者はミュートを付けてファンファーレ風に演奏する。

カプリッチョ1：ABA'B'A"形式

カデンツ(ピアノソロ)：ピアノパート特有のテーマを弾きながら次第にカプリッチョ2へつなげていく。

カプリッチョ2：ABA'-コード形式 ユーモアを持って。

カデンツ(ピアノソロ)：一番長いカデンツ。カプリッチョ3につなぐ。

カプリッチョ3：ABA'CA"-コード形式 ゆるやかなミロンガで大部分が4分の5拍子。悲哀に満ちて。

カデンツ(ピアノソロ)：最初のカデンツと共通。次第にカプリッチョ4につなげていく。

カプリッチョ4：ABA'-コード形式 4分の7拍子。中心部分はトッカータ風。

Edited by Hiroko Nakamura

館野泉 タピオラ幻想 -左手のためのピアノ作品集2-

吉松隆：タピオラ幻想 作品92(館野泉に献呈)

光のヴィネット / 森のジグ / 水のバヴァーナ

鳥たちのコンマ / 風のトッカータ

タカーチュ：トッカータとフーガ 作品56

ノルドグレン：小泉八雲の『怪談』によるバラードII

作品127(館野泉に献呈)

振袖火事 / 衝立の女 / 忠五郎の話

モンボウ：プレリュード 第6番

CD AVCL-25076 ¥3,143(税込)

館野泉
DISCOGRAPHY▼



avex classics



ノルドグレンと

パール・ヘンリック・ノルドグレンが館野泉に寄せたエッセイより

1970年から73年までの私の日本留学中の最大の精神的体験として小泉八雲(1850-1904)の著作に知り親しんだことがあげられる。簡潔な、そして洗練された知的な語り口で、八雲は我々に昔の信じ難い物語を、神秘的な出来事を、そして魔神と亡霊の世界を伝えてくれる。

これらの物語は、作曲をすすめるうえで音楽的な想像力を刺激する力となって働いたが、各曲は具体的に物語の細部を描写するものではなく、その中に揺れ動く感情や雰囲気、そして物語を読むうちに私自身が心で感じたり考えたことを、音楽として定着しようとしたものである。全10曲のバラードは、その素晴らしい演奏で私を限りない喜びにひたらせてくれた館野泉に捧げられている。

(1979年初版発行の全音楽譜より抜粋)

館野とともに音楽の道をたどることは、私の作曲家としての人生に計り知れない貴重なものを与えてくれた。はじめて日本に行く以前から、彼の演奏に強く惹かれていたが、いっしょに仕事を重ねるたびに、その演奏の大きく深い個性に傾倒していった。新しい作品に触れるとき、彼はまったく先入観に捉われず、その解釈には稀に見る自然さと大らかさが支配していた。私の作品では、その大切な要素である“抒情的劇的”性質と完全に一体となっているようであった。1972年、仙台での「耳なし芳一」の初演をいまだに忘れることができない。彼の演奏はこの地上的なものからまったく離れて浮遊しているようであった。彼はピアノ曲の第一歩に大きな励ましを与え、以後の創作に迷いなく立ち向かう力をくれたのである。

(2005年発行の音楽の友初版より抜粋)

館野泉 演奏生活65周年

卒寿記念コンサートに寄せる お祝いの言葉

I cordially congratulate Mr. Izumi Tateno on a very special 90th Birthday as well as the 65th anniversary of his music career.

Music has a wonderful power to connect people and inspire them beyond borders; music is a unique tool for fostering togetherness. I would like to express my heartfelt respect to Mr. Tateno for demonstrating this across generations and regions.

As a representative of Finland, I also would like to thank him for his many years of contributions, serving as an excellent bridge between Japan and Finland.

It is my great pleasure to celebrate this special moment with all of you. I am sure that we will cherish this memory for many years to come.

Tanja Jääskeläinen

Ambassador of Finland to Japan

館野泉様の90歳の誕生日、そして音楽活動65周年を心よりお祝い申し上げます。

音楽には、国境を越えて人々を結びつけ、感動を与える素晴らしい力があります。そして、人と人との繋がりを育むための比類なきツールです。世代や地域を超えて、この力を発揮してくださった館野氏に心からの敬意を表します。

また、フィンランドを代表して、長年にわたり日本とフィンランドの素晴らしい架け橋として尽力されてきた館野氏の貢献に感謝申し上げます。

皆様と共にこの特別な瞬間をお祝いできることを大変嬉しく思います。きっと、私たちにあって末永く大切な思い出となることでしょう。

駐日フィンランド大使

タンヤ・ヤースケライネン

館野さんは僕にとって最も大事な、そして心酔している音楽家だ。そのお人柄が全てを物語っている。あの素晴らしいお人柄と、稀に見る音楽に対する真摯な生活。頭が下がりがっぱなしである。若い頃から一緒にきたが、僕にとって初めての海外のオーケストラとの仕事は、館野さんが招待してくださった、ヘルシンキ・フィルハーモニーだった。日本フィルハーモニー交響楽団との旅、東京フィルハーモニー交響楽団とのヨーロッパ旅行など、思い出は尽きないが、今年4月の東京フィルハーモニー交響楽団との“ラヴェルの左手のコンチェルト”、そしてアンコールに弾いてくださった“赤とんぼ”、ほんとうに、素晴らしかった！

演奏生活65周年・卒寿記念コンサート、心からお祝い申し上げます。いつまでも演奏を続けてください。また一緒にできたら光栄です。

指揮者 **尾高忠明**

館野さん、演奏生活65周年、そして卒寿、本当におめでとうございます。

静かな微笑みと燃える心。私の知る館野さんは、表情は穏やかですがいつも燃えていらっしゃるようです。館野さんほど激しい情熱の中で生きていらっしゃる方はいないのではないかと思います。少年、青年、壮年、そして今日まで、館野さんの90年間は興味津々、何かに喜びを見つけ続ける毎日だったのではないのでしょうか。

コンサート中に倒れられた後、暫くしてお会いした時に館野さんはおっしゃいました。「左手で弾くことになったから、これまでに気づかなかったたくさんのことを感じるようになったんですよ」その言葉に、私は大感動しました。音楽を愛し続け、音楽への夢を広げ続け、それを多くの人たちに伝える館野さん。お名前の「泉」の文字通り、館野さんの音楽は湧き出る泉です。

これからもいつまでも、私たちに素晴らしい音楽を届けてください。

ピアニスト **小山実稚恵**

館野先生のお姿を初めて拝見した時のことです。先生の放つ一音目を浴びた瞬間、場の空気が一変し、特別な気配に包まれるのを感じました。それはとても親密で温かなオーラです。気がつけば微笑みがこぼれ、やがて館野泉というお人柄そのものの魅力に引き込まれていきました。私は幸運にも、先生と連弾をご一緒する機会に恵まれたのです。同じピアノを奏でているはずなのに、先生の放つ音は驚くほど伸びやかで、深く心に染み渡っていきます。その秘密をそとと盗み取ろうと試みるも、容易に得られるものではありません。それもそのはず、両手で技術に頼ろうとする私とは異なり、先生は左手一本で音に魂を捧げ、そのすべての人生を賭けて音楽を紡がれているのです。その揺るぎない強靱な想いこそ、多くの人の心に訴え、深い感動を与えるのでしょう。

大切な卒寿の記念公演に何うことが叶わず、大変申し訳なく存じます。遠いベルリンからですが、この佳き日に思いを馳せ、心からのお祝いと感謝を伝えさせていただきます。

ピアニスト **藤田真央**

物語が聴こえるピアノの秘密

館野泉さんのピアノからは、いつも物語が聴こえる。幸運なことに、20年以上にわたって仕事を一緒にさせていただいてきたが、舞台上で一緒にするたびに、それがどこからやってくるのが不思議だった。そんなあるとき、ふと館野さんから本の香りが漂ってくることに気がついた。不肖本好きのはしくれとして、ぜひ本の話が伺いたいとご自宅にお邪魔すると、玄関から寝室の横、ピアノのうえまで、いたるところに置かれた小説や詩集、画集など、膨大な本に囲まれた館野さんの暮らしがあった。ぼくが軽井沢に小さな図書館をつくることになったとき、大切な蔵書をまっさきに寄贈してくださったのも館野さんだった。その陽だまりのようなあたたかさに、館野さんのピアノ物語の秘密が少しわかった気がした。館野さん、卒寿おめでとうございます。これからも、いつまでも、すてきなピアノの物語をたくさん聴かせてください。

浦久俊彦 文化芸術プロデューサー

「親交のあるアーティストたちからお祝いのメッセージ」



泉のような木、生まれ出ずる音楽のための

—— 館野泉、卒寿に寄せて

青澤隆明(音楽評論)

遙か遠くに、しかし親しく思い浮かぶのは、大きな木である。木は林や森をかたちづくりもするが、どうかその木は広い草原で、空に向かって、一本だけ枝を広げているようにみえる。

雨も嵐も風も雷も、光も影も、枝や葉を揺らすものすべてを内なる養分として、この木は遅しく、のびやかに生きてきた。その寡黙で雄弁な誇りが、多くの生命や時空を引き寄せてきた。

その木には年齢がない。歳月というものを湛え、また自らが歳月として、この星の上に静かに佇んでいる。言葉も黙して静かに、しかし熱く激しく、雄弁に。

年輪は幹のうちに記されている。樹齢と人は言うが、そもそも木は自身の年齢を知っているのだろうか。知ってはいるだろう、しかしそれを表には出さず、黙っているはずだ。なぜなら、木は言葉より多くのものを蓄えながら、大地と大空の間に立っている。それだけで、木は生命を謳歌し、自然の循環にふさわしい位置と役割を占めている。

生きて生かし、生かされて生きる。鳥たちや虫たちやさまざまな生き物がその葉や枝や幹や根もとにやってくるのは、だからごく自然で、あたりまえのことなのだ。というより、そもそも自然というのは、生命というものは、そのようにして成り立っているのである。

それでいて、不思議なことに、その木は歩きもし、語りもし話しもし、歌いもし、踊りもして、さらに多くのものを惹きつける。大きく旅する木であるが、その足元にはしかし、いつも親しい大地が広がっている。

見上げる空はどこまでも広がり、繋がっている、そのなかに朝や昼や夜や夜明けが移ろっている—— 私たちはふつう、そのように思うが、実のところ、大地もひとつに繋がっているのだ。海のような大きな水たまりによって、大きく隔たれているようにみえたり、高い山々によって歩行を断たれていたりもするが、実際のところ、海の底には地が続いている、山は地の堆積や高揚とみてよいものなのだ。

なんの話をしているのか。もちろん、館野泉の話である。しかしそのまえに、音楽そのものの話でもある。音楽の樹齢に比べたら、ひとりの人間の一生など、わずかなものに過ぎないだろう。それが90年の長きにわたり、しかも65年にわたって脈々と私たちに向かって広く開かれてきたものであるとしても、である。しかし、ほんとうにそうなのか。

ヨーロッパの森をみてみよう。西ヨーロッパの、それもかぎられた土地で、さまざまな木が育ち、森が生い茂った。それが大地や海を超えて広がっていく。どこまで源泉を遡れるだろうか、中世ならば1500年、ルネサンスならば500年ほど前、これならば大木の樹齢にも通じるだろう。音楽の歴史は、そうしてようやく樹に追いつこうとしている。そんなことを思うのは、ピアニストがその心身を幹のようにしてその都度汲み上げる作品が、遥かな静けさに向かって手をのばしているように感じるからだ。

そして、館野泉は年齢を知らないか、忘れているか、知らないふりをしている。そもそも、終わりのない、手探りの旅なのだ。その手が手練り寄せ、心が動いてきた分だけ、かの人々は遠くに旅してきたことになる。それだけでなく、実際に世界の各地を訪れてきて、88歳で初めてプータンにも行った。そもそも、デ

ビューしてほどなく移り住んだのが、ほかならぬフィンランドである。あえてウィーンやパリ、ロンドンやニューヨークですらない。文学を通じた憧れがあり、高校時代にペンフレンドもいたのが、北欧はフィンランドだった。どうかしている、とまわりの人は思ったかもしれないが、ご本人にはおそらく一滴の迷いもなかった。すべての直観にはきっと、なにかの愛が通っているのだ。

そこには、音楽があり、音楽があるからには人間がいる。人間がいるから、人間の音楽が奏でられる。しかし、私はそれを聴いていて、もっとたくさんの自然が、いっしょにそれを聴いているような心持ちになることがある。館野泉のピアノを聴いているときには、私たちには、空があり大地があり、風が流れ、水が巡り、歌がやむにやまれず湧き起こり、そしていつまでも夢みていられる。そう感じる。

生きているなあ、と思う。いま生きていると思えることが、音楽の不思議である。それは館野泉がそのように、年齢を知らず、ただまっさらに音楽をみつめているからにちがいない。

*

館野泉という音楽家が生きてきた歳月を思うと、その遠大さと勇壮さに、途方に暮れるばかりになる。たとえば、ヤンネ・館野が中心となって結成したラ・テンペスタ室内管弦楽団が行った2019年5月の日本ツアーは、日本とフィンランド外交樹立100周年を記念してのものだった。シベリウス、ラウタヴァーラ、ノルドグレン、そして館野泉がソリストに加わる左手のためのピアノ協奏曲が、ノルドグレンの「死体にまたがった男」と光永浩一郎の「泉のコンセル」 というプログラムだ。

このとき館野泉は82歳で、フィンランドに暮らし始めて55年にもなっていた。そもそもフィンランドが独立したのは日本と国交をもつ一年半前、1917年のことなのである。つまり、館野泉の人生は、ほとんど一国の歴史にも近い年月をもつもので、となればそこには過去から未来へ向かう大きな流れが脈打っていることにもなる。それはこの場合、民族の歴史ということを超えて世界各地の音楽、すなわち人間の創造力の領土を大きく旅してきた真率な時間に支えられているものだ。

そして、私のように遅れてやってきた者にとっても、館野泉の音楽はいまも初々しいと思えるほどに新鮮で瑞々しいのだが、ほんとうの始まりの頃にはいったいどのような青春を謳歌していたのだろうか？

新しい世紀が始まった2001年、演奏生活40周年を記念したリサイタルを、館野泉は3つのプログラム構成で聴かせていった。その最初のプログラムは「青春」と題され、41年前の9月28日、有楽町の第一生命ホールで行ったデビュー・リサイタルと同じ曲目を、2001年の同じ日に東京オペラシティで再訪したものだ。始まりはエネスクの第3ソナタ、たまたま大好きなリパッティがレコードに入れていた曲だ。こどもの頃から大好きだというシューマンからはファンタジー、ラフマニノフのop.23から4つの前奏曲、そして藝大の卒業試験で弾いたプロコフィエフの第2ソナタを弾き継いでいった。「演奏はもしかするといまのほうが若々しいかも知れない」とかのピアニストは語っていたのだ、「若い頃のようにシャイで遠慮がちに照れたりしないで、ロマンティックな情熱がはっきりと出せるようになった」からだ。シャイな若者の声も聴きたかったけれど、そこに広がったのはロマンティックな憧れと感情に溢れた音楽だった。

ふたつめのプログラムは「恋する男たち」の名のとおり、グラナドスの「ゴイエスカス」に、スカルラッティのソナタを7曲。「ゴイエスカス」はムソルグスキーの「展覧会の絵」などととも、11歳から師事した豊増昇が彼に薦めてくれた曲目でもあった。

おわりのプログラムが「星にとどく樹」で、エストニア現代のシサスクの組曲「銀河巡礼(北の星空)」と組み合わせてシューベルトの変ロ長調ソナタを弾いた。こんな素敵なのはきっと館野泉しか思いつかない。最後のソナタは作曲家の生誕200周年を祝う1997年にシューベルトの7夜の連続演奏会をしめくくった曲で、そのときにもシューベルトを「星にとどく樹」と称え、このシリーズを「星にとどく道」を辿るものと館野は告げていた。このとき、変ロ長調ソナタD.960、シューベルトの「白鳥の歌」の前には、中期のイ短調ソナタ D.845を組み合わせた。

「中期のソナタ三曲の冒頭が、どれも同じ形で書かれているのも興味深いこと。最初にユニゾンで単純な旋律、そして合唱のような和音進行。この形が繰り返されるのが、問いと答えのようですし、問いかけながら旅を続ける孤独な姿にも見えます。シューベルトの無意識の世界に、この屈折と執拗に激しい旅の旅程は、一本の樹が完結へと伸び行く道として見えていたのでしょう」。

音楽家はそう1997年のプログラムに纏っていたが、それから30年弱が経っていまこの言葉を訪ねると、ほとんどそれが彼自身のことであるように思えてしかたがない。歌と祈り、問いと答え、孤独な旅。それが一本の樹のように伸びていくものとして想われている、この屈折と執拗に激しい旅の旅程……。

館野泉のデビュー・リサイタルを聴くことは、私には生まれるまでとても無理だったけれど、さらにもう少し若い彼の「青春」は1959年春、東京藝術大学奏楽堂でのコンサートの録音で聴くことができる。浦川宜也をヴァイオリン独奏に招いて、ショーンソンのコンセールを演奏したのは、まだ彼が藝大の3年生のときで、館野英司、館野晶子が揃い踏みしたときの演奏会がオープンリールから復刻されて近年CDになったのだ。ときに前のめりに没入するような局面もあるが、奔流のように身を挺して音楽を生きることを欲した若者たちの熱き血潮を感じさせる生きた魅力に漲っている。

さて、初めてのリサイタルが先の曲目なら、翌1961年に開催した第2回では、三善晃、平尾貴四男、中田喜直のソナタと宅孝二のソナチネという日本人作曲家の作品ばかりを組んだ。それ以降も日本人作品の演奏には積極的で、矢代秋雄、間宮芳生、野田暉行の協奏曲ほかの海外初演も手がけている。自主リサイタルでは、翌々年の第4回でメシアンの「幼子イエスに注ぐ20のまなざし」全曲を日本初演した。新しい作品への夢猛なほどの関心は、現在の「左手の文庫」の委嘱初演活動にいたるまで、若き日からの変わらない情熱なのである。

このように振り返るなかで改めて確認しておきたかったのは、館野泉は北欧音楽のスペシャリストなどでは決してなく、北欧の作品においても水際立って豊かな演奏ができるという事実である。たしかに、日本でも1989年から93年に、「フィンランド音楽祭」を音楽監督として5回にわたり多彩に織りなしたほどの彼を、この分野や方面のスペシャリストと称賛するのは不自然なことではないようにみえる。しかし、この分野というような言いかたからして、すでに館野泉の自由と独立の気風には似つかわしくない。

おそらくフィンランドに暮らす前から館野泉はシベリウスやグリーグなど北欧の作曲家の作品も素敵に演奏していたに違いない。およそ権威やレッテルというものが気に食わないからこそ、青年はまだほとんど誰も知らない北欧の地へと旅立ったのではなかったか。そうした反骨ともみられる頑固なまでの抵抗と挑戦の精神が、豊かな抒情を謳う彼の音楽の強い芯としてあるところにも、私は自ずとつよく惹かれてきたのだと思う。ごく簡潔に言えば、館野泉は真のロマンティストであり、冒険の憧れに正直であるがゆえに、専門という領土に閉じ込められることなく、紛れもなく自由な先駆者であるほかなかったのだ。

初期の頃を同時代としては生きられなくとも、レコーディングを辿れば、1970年からまずは東芝EMIの専属として膨大なディスクをリリースしてきた彼の偉大な足跡を追うことはできる。そこでもいち早くヤナーチェクとラウタヴァーラを録音しているように、やはり館野泉という音楽家は、未知のレパートリーを冒険するのが大好きなのだ。ましてや、彼を思っ、自身のために書かれた作品が目前にあれば、どれほどそれが困難で、どれだけ時間をかけようとも、そこに彼自身の響きを与えるまでのことだろう。

*

日本の5都市での40周年記念リサイタルをおえた翌2002年の1月9日、フィンランドのタンペレでのチャリティ・コンサート最後の曲、グリーグの抒情小品「トルドハウゲンの婚礼の日」を弾くさなかに異変が起った。最後の音まで弾き終えてお辞儀をしたものの、館野泉は脳出血を発症していた。

右手に神経が伝わらず動かなくなって2年が経つ頃、帰省したヤンネがピアノの上にそっと置いたフランク・ブリッジの「3つのインプロヴィゼーション」が、左手の演奏への活路を拓くことになった。そこから20年余りで、館野泉は左手のための既存の作品だけでなく、新しいレパートリーを旧知の友人に留まらず、新たに出会う作曲家たちとともに大きく冒険的に拓いてきた。

ソロ、室内楽、コンチェルトに、編曲も含む真新しい作品は、いまいったい何作を数えるのか。作品は数では捉えられないから、あえて数えることもしないが、平野一郎の「鬼の生活」や「鬼の学校」に夢中になる館野泉や若き同志たち、パブロ・エスカンデの「奔放なカプリッチョ」、数々の名品を館野に捧げてきた吉松隆が朗読とピアノやチェロに書いた「KENJI」の草笛光子の語りによるステージなどが、近くはまざまざと思い出される。光永浩一郎の新作やセヴラックやモーツァルトからの編曲、cobaの「記憶樹」の再演や、谷川賢作の「スケッチ・オブ・ジャズ」のシリーズなども。こうして挙げていったら、きりがいい……。

古くて新しいところでは、ラヴェルの「左手のための協奏曲」を今春、尾高忠明の指揮する東京フィルハーモニー交響楽団の2025年4月定期で演奏したのが、じんわりと心に刻まれている。館野泉が若い頃、幾度もオーケストラに提案しては断られたという話で、右手が利かなくなったときには「弾くものか」と心が反発した曲である。その後、何度となく弾いてきたこのコンチェルトを、このときひさしぶりに弾いた。以前の厳しさとはまた異なり、瑞々しい寛容さがやわらかく通っていたように私には思えた。

*

館野 泉 Izumi Tateno (ピアノ, Piano)

1936年東京生まれ。父はチェリスト、母はピアニスト。豊増昇、安川加壽子、レオーニード・コハンスキーに師事。1960年東京藝術大学を首席で卒業。同年9月28日第一生命ホールにてデビューリサイタル(エネスコ:ソナタ第3番(日本初演)、シューマン:幻想曲、ラフマニノフ:前奏曲4曲、プロコフィエフ:ソナタ第2番)を行う。翌年、第2回リサイタル(三善晃、平尾貴四男、中田喜直のソナタ、宅孝二のソナチネ)で新人ベストテンに選ばれ「常に前進と変貌を続けるピアニスト。今日の彼は昨日の彼ではなく、明日の彼は既に今日の彼ではない」と評される。

1964年よりヘルシンキ在住。同年10月ヘルシンキでデビューリサイタルを行い、7つの新聞に絶賛の批評が掲載。翌年よりヘルシンキ・フィル(指揮:パーヴォ・ベルグルンド)やフィンランド放送響(指揮:クルト・マズア)等フィンランドのオーケストラと共演を重ねる。68年メシアン現代音楽国際コンクール第2位。1974年第4回福山賞受賞。

演奏会に訪れた先は多岐に渡り、ベトナム、ラオス、タイ、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ミャンマー、インド、中国、香港、韓国等のアジア、メキシコ、アルゼンチン等の米大陸、ロシア、クロアチア、アルメニア、ルーマニア、ウクライナ、リトアニア、モルドバ、トルコ、北欧5カ国、欧米に加えオーストラリア等、先進国、後進国を問わず世界各地で演奏活動を行い、その温かく人間味あふれる演奏によって、あらゆる地域の聴衆に深い感動を与える。

国内では、1974年日本フィル定期/指揮:イルジー・ピエロフラーヴック(ハチャトゥリアン:ピアノ協奏曲)、77年読響特別演奏会/指揮:フリューベック・デ・ブルゴス(ファリャ:スペインの庭の夜)など、各方面から絶賛され注目をあびる。80年日本フィル/指揮:渡辺暁雄(ブラームス第1番、ラフマニノフ第3番)による演奏生活20周年記念コンサート、88年のリサイタル(グラナドス:組曲「ゴイエスカス」全曲、シューベルト:さすらい人幻想曲)、2大コンチェルトのタベ、また、シューベルト生誕200年の1997年にはピアノ作品を7夜で構成する還暦記念コンサートを、東京・大阪・福岡・札幌・ヘ

ルシンキで成功させるなど、独創的で意欲的な企画で毎年演奏会を行う。99年より共演者に故岸田今日子を迎えた「音楽と物語の世界」は全国50都市で公演を行う人気を博す。

国内外における初演も数多く、1964年のメシアン:幼な子イエスにそそぐ20の眼差し全曲(演奏生活25周年記念リサイタルで再演)をはじめ、71年にコッコネン:5つのバガテル、72年にブリテン:ピアノ協奏曲、90年に間宮芳生:協奏曲第3番などがあり、邦人作品の海外初演には、矢代秋雄:ピアノ協奏曲、ピアノ・ソナタ、八村義夫:彼岸花の幻想曲などが挙げられる。更にノルドグレン:ピアノ協奏曲、小泉八雲の怪談によるバラード、ラウタヴァーラ:ソナタ「キリストと漁夫」、間宮芳生:よだかの星など多くの作品が献呈される。

フィンランドでは「北欧人以上に北欧的」と評され、人気が高く、柔和で上品な人柄は、フィンランドにおいて代表的かつ模範的な日本人となっており、日本及び日本人に対するイメージを高めた。フィンランド政府より日本人として初めての芸術家給与を受け、15年間支給の資格を受けた唯一の日本人となる。1976年フィンランド大統領より獅子第一等騎士勲章を授与される。また、フィンランドの大作曲家シベリウスと縁が深く、シベリウスのピアノ使用を許された数少ないピアニストであり、世界で初めてシベリウス邸宅でそのピアノを使用したCD制作を行う。ウーノ・クラミやパルムグレン、メラルティン、ハイニカイネン、カスキなどフィンランドの多くの作曲家の作品を演奏し好評を博す等、新しい音楽を紹介するとともに、フィンランド音楽については20冊の楽譜の編集、解説等を行う。それらの功績に2006年、シベリウスにおける権威ある賞「シベリウス・メダル」がフィンランド・シベリウス協会より授与される。

教育の分野においては、1968年よりフィンランド国立音楽院シベリウス・アカデミーの教授を務めるほか、日本でも活水女子大学、大阪芸術大学などで教鞭をとる。83年4月～9月まで、NHK教育「ピアノとともに」講師を担当。本質を見抜き、自分で本質を伸ばし育てることのできる力を引き出す指導は、精神的面と技術的面のバランスを傍らからサポートするものであり、す

先にも述べたように、私のように遅れて生まれた者にとっては、館野泉の青春については——もしそれが長く続いているにしても、ほんとうに若かった頃のことは——知らないことばかりだ。というよりも、彼の人生のことも生活のことも、ほとんどなにも知らないままである。ただ、ピアノを聴いて、折々に綴られる文章を読んで、それからときどき言葉を交わすようにもなって、勝手に慕う心が育ってきただけのことで。

フィンランドでこの間、ぼくの伝記が出たんですよ——。顔をほころばせながらそうおっしゃる館野さんから、2023年1月に手渡されたのが“IZUMI TATENO | PIANON SAMURAI”という本だった。がっちりした体裁の本で、著者のサラ・ラウティオはチェリストのエルッキ・ラウティオの夫人だという。フィンランドの出版社の名がfuga 1960と記されているのがまたよくて、1960年は館野泉が藝大を卒業した年でもある。あいにくフィンランド語は私にはわからないが、ページをめくって写真を眺めているだけでも、いろいろ感じるころはあった。それが昨夏、ご本人の監修のもと、五十嵐淳訳による日本語版がまとめられ、『奇跡のピアニスト 館野泉』の題で、みずいろブックスという出版社から出たのである。

館野泉という人の歩んできた軌跡について、私がやはりなにも知らないということは、この本を読めば読むほどにわかってくる。彼がなにをみてきたか、広く旅してきた風景や心象についても。

なのに、どうしてだろう？ 館野さんのピアノを聴くと、この音は私を知っているのだ、とたしかに感じる。たしかに、というのはつまり、どこか心の深いところで、という感覚だ。もしこれまで、実際に耳にしたことが仮になかったのだとしても、それが深く望んできた響きだということは自ずとわかるように。

なぜなら、私はそれに触れるからである。おかしなことを言うようだが、実感としてそうなのだから、それはとうにこの私の記憶を超えている。そういうことなのだろう。どこからか木のように、すくくとのびている。手をのばしている。

そのようにして、私は折に触れ、たいせつな想いをもって、館野さんの木をみつめてきた。深く近くにあるものみつめていながら、同時に遥かなものを眺めているというような感覚で。その両方を館野さんの音は、館野さんの音楽は、豊かに結びつけている。

一本の木が本になるまでに、あとどれだけの静けさが要るのだろう。それにはどれだけの歳月がページとして重なり、行ったり来たりしながらも捲られ、さらに多くの旅を味わいながらも、最後には白紙に近いような、清らかさに辿り着くのだろう。

本が書かれるためには、余白がなければ、真っ白な白紙がなければいけない。館野さんのなかには、いつもそのための静けさがあるのだと思う。それは激しく、手がつけられないほど獐犷で、頑として、ひっそりと、やわらかく澄み、そしてたえようもなく愛おしいものだ。

そうした憧れがピアノを伝って、音のある世界と音のない世界を結ぶ。静けさが音を支え、いろいろな音が折々に静けさを深めていく。いや、そもそも音のない世界などというものはなく、音楽と自然とそうでないものとの間には、おそらく違いはないのだった。それでも、館野さんは音楽として、それを汲み上げていく。大地から天空へと、その心身をたしかに通じて、多くの水で人々の心の渇きを満たすように。いつも湧きかえる泉のような、終わりのない歌が太古からずっと続いているように——。

るとい洞察力と深い指導力で、決して、表面だけの美しさや伝統的な解釈の形にとらわれることがない。その精神を受け継いだ教え子たちは、世界中の様々な音楽と教育の場で活躍している。また、96年に若い演奏家育成のために「タテノ・セブ基金」をフィリピンに創設し、98年～04年フッペル平和祈念鳥栖ピアノコンクールの審査委員長を務める。

音楽祭では「クフモ音楽祭」、「フィンランド音楽祭」、「ノルディック・ライト 北欧音楽祭」、「オウルンサロ音楽祭」で音楽監督を務める。

2001年演奏生活40周年記念コンサートをヘルシンキと日本の主要都市で行う。翌年、脳溢血で倒れ右半身不随となる。

04年5月より“左手のピアニスト”として演奏活動を再開。尽きることのない情熱を一層音楽の深求に傾け、独自のジャンルを切り開く。06年全て委嘱作品によるリサイタル「彼のための音楽を彼が弾くVol.1」をサントリーホールにて行う。同年、「館野泉左手の文庫(募金)」を設立。現在まで、館野泉の左手のために10カ国の第一線で活躍する作曲家より130曲をこえる作品が献呈される。08年長年の音楽活動の顕著な功績に対し、旭日小綬章受章、および、文化庁長官表彰受賞。

セヴラックの生地で行われるセヴラック音楽祭に02年より毎年招待され、日本におけるセヴラック研究に多大な貢献を行ったとして2010年サン＝フェリクス＝ロウラゲ(ラングドック)の名誉市民の荣誉に授かる。2011年夏、ヘルシンキで東日本大震災復興支援チャリティ・コンサートを行う。2012年NHK大河ドラマ「平清盛」テーマ曲のソリストを務める。同年ウィーン、ハンガリー、フランス、エストニア、ヘルシンキ、モントリオール、ベルリンにて海外公演を行う。2012年度東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門本賞(旧エクソンモービル音楽賞)受賞。2013年7月デュッセルドルフにて一柳慧とラヴェルのピアノ協奏曲を演奏、8月オウルンサロ音楽祭(フィンランド)の音楽監督を長年務めた貢献に記念レリーフが贈られる。ヘルシンキでの館野泉77歳アニヴァーサリーコンサートは、冒頭から聴衆が総立ちとなる喝采をあげた。

左手ピアノ音楽の集大成「館野泉フェスティバル～左手の音楽祭」は、2012年5月から2013年11月に

かけて都内会場で全16回のコンサートが構成され、最終回は3つのピアノ協奏曲(池田晋一郎、吉松隆、ノルドグレン)を、ラ・テンペスタ室内管弦楽団としめくくった。2016年80歳の傘寿記念公演は指揮：高関健、東京シティ・フィルと4つのピアノ協奏曲(池田晋一郎、ヒンデミット、ルネ・シュタール、ラヴェル)を演奏。同年、第29回ミュージック・ベンクラブ音楽賞受賞。2019年日本・フィンランド国交樹立100周年の親善大使として日本とヘルシンキでラ・テンペスタ室内管と共演(光永浩一郎、ノルドグレン)。2020年に演奏生活60周年を、2023年に米寿を迎えての記念演奏会を全国各地で行う。2022年平野一郎「鬼の学校」を全国12都市に展開。2024年9月インド、プータン、ネパールで演奏。文化や言葉の壁を越えて多くの聴衆が涙した。

リリースされたCD・LPはENI、ポニーキャニオン、キング・レコード、ワーナーミュージックから130枚にのぼり、いずれのアルバムも世界中の幅広い層の聴衆の熱い支持をえている。ロシア、東欧、北欧、近代フランス、スペイン、南米音楽にも、優れたレコーディングをのこし、それらはフィンランド最優秀レコード賞、文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞を受賞するなど名盤として評価されている。左手のためのCDは、エイベックス・クラシックス、オクタヴィアレコードほかよりリリース。

著書「ひまわりの海」「館野泉フォトストーリー」(求龍堂刊)、「絶望している暇はない」(小学館刊)、「命の響」(集英社刊)、「ピアニストの時間」(みすず書房刊)、「左手のコンチェルト」(佼成出版社刊)、「ソリストの思考術・館野泉の生きる力」(六耀社刊)、「奇跡のピアニスト」(みずいろブックス刊)、楽譜「左手のピアノシリーズ」(音楽之友社)を出版。

南相馬市民文化会館(福島県)名誉館長、日本シベリウス協会最高顧問、日本セヴラック協会顧問。

日本の、クラシックのアーティストとしては初めての、そして最も長続きしている「ファンクラブ」を各地に持つ。

2025年、館野泉は演奏生活65周年を迎えた。数え年90歳の「真の巨匠」の音楽は、極限まで研ぎ澄まされ、まさに「泉ワールド(IZUMI WORLD)」へ聴くものを惹きつける。

平石章人 Akito Hiraishi

(指揮, Conductor)

指揮を下野竜也、大河内雅彦、広上淳一、田代俊文の各氏に師事。2017年に渡欧、ウィーンにてJ.ヴィルトナー氏の元で研鑽を積んだ。2022年から2024年にかけてNHK交響楽団の指揮研究員を務め、2023年11月には、V.フェドセーエフ氏の代役としてNHK交響楽団定期演奏会の前半プログラムを指揮した。これまでにNHK交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、九州交響楽団、広島ウインドオーケストラを指揮。洗足学園音楽大学、エリザベト音楽大学非常勤講師。

甲斐雅之 Masayuki Kai

(フルート, Flute)

東京藝術大学を経て同大学院修了。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽院にて研鑽を積む。第61回日本音楽コンクール・入選。第9回日本フルートコンヴェンションコンクール・入選。オーケストラ活動のみならずソロや室内楽で活躍する他、各地の音楽祭などに参加する。アジアフルート連盟理事。東京音楽大学講師、洗足学園音楽大学講師、エリザベト音楽大学客員教授。NHK交響楽団首席フルート奏者。

辻本憲一 Kenichi Tsujimoto

(トランペット, Trumpet)

1994年東京藝術大学音楽学部器楽科入学。1996年第65回日本音楽コンクール第二位、特別賞受賞、第13回日本管打楽器コンクール第二位受賞。1997年東京フィルハーモニー交響楽団入団。1998年東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。2000年～2001年アフィニス文化財団の奨学金を受けドイツ、ハンブルグに留学、エリゼマイヤーコンクール第一位受賞。2004年東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者就任。2016年より読売日本交響楽団首席奏者。

伊藤 駿 Shun Ito

(トランペット, Trumpet)

大阪市出身。2014年京都市立芸術大学音楽学部管打楽専攻卒業。2016年桐朋オーケストラアカデミー修了。同アカデミー在籍時に新日本フィルハーモニー交響楽団に首席奏者として入団。同団を経て2019年より東京都交響楽団トランペット奏者。第6回関西トランペット協会コンクール第1位。第30回ヤマハ管楽器新人演奏会出演。トランペットを宮村聡、早坂宏明、杉木峯夫、白水大介に、室内楽を呉信一、若林義人の各氏に師事。

新田幹男 Mikio Nitta

(トロンボーン, Trombone)

大阪音楽大学卒業。トロンボーンを呉信一氏、Nitzan Harozに、室内楽をDaniel Doyonに師事。仙台フィルハーモニー管弦楽団、読売日本交響楽団を経て、現在、NHK交響楽団首席トロンボーン奏者。2019年には、Alessi Seminer in Asiaにジョゼフ・アレッシのアシスタントインストラクターとして招聘された。東京音楽大学特任教授、大阪音楽大学 客員教授。ハイブリッド トロンボーン四重奏団、Trio Diesel、Brass code 12、各メンバー。

ザッカリー・ガイルス Zachary Guiles

(トロンボーン, Trombone)

アメリカ合衆国、バーモント州出身。オーバリン音楽大学、ニューイングランド音楽院卒業。トロンボーンを元クリーヴランドオーケストラ首席奏者ジェームズ・デサノ、元ボストン交響楽団奏者ノーマン・ポルター各氏に師事。2012、2014年タングルウッド音楽祭、2013年ノアフォーク室内楽音楽祭に奨学生として参加。ユタシンフォニー副首席奏者、リッチモンド交響楽団首席奏者を経て2022年東京都交響楽団のトロンボーン奏者として入団。

野々下興一 Koichi Nonoshita

(バストロンボーン, Basstrombone)

1975年東京都生まれ。洗足学園大学卒業。第一回大阪トロンボーンコンペティションアンサンブル部門最高位入賞。バストロンボーンを秋山鴻市に師事。東京都交響楽団バストロンボーン奏者。東京音楽大学講師。名古屋音楽大学客員准教授。侍プラス、Trio Diesel、Brass Code 12、各メンバー。

齋藤 充 Mitsuru Saito

(ユーフォニアム, Euphonium)

国立音楽大学卒業、ミシガン大学大学院修士課程、ノーステキサス大学大学院博士課程修了。日本管打楽器コンクール、フィリップ・ジョーンズ国際コンクール、レオナルド・ファルコーニ国際コンクールにて第1位。NHK-FMリサイタル、東京オペラシティ・リサイタルシリーズB→C、国際チューバ・ユーフォニアムカンファレンス等に出演。国立音楽大学、洗足学園音楽大学、尚美ミュージックカレッジ専門学校他各非常勤講師。侍プラスメンバー。

舘野泉の左手のために書かれた作品リスト (2004-2025)

★舘野泉左手の文庫(募金)助成作品 ★音楽之友社より楽譜「左手のシリーズ」(舘野泉監修による)

ピアノ・ソロ作品

カレヴィ・アホ／静寂の渦(2021)＊
池辺晋一郎／1枚の紙と5本のペン(2017)＊★
一柳 慧／FANTASIA(2018)＊
伊東 乾／水の幻映(2009)
Z.グィツツキ／3つの小品 Op.79(2018)＊
ヴェリ・クヤラ／左手のための3つの舞曲集～タンゴ・サンバ・ワルツ(2006)
P.エスカンデ／ディヴェルティメント(2009)＊★、3つの俳句(2019)＊★、悦楽の面～ ヒエロニムス・ボスのトリプティックによる自由な幻想曲(2020)＊、
ナイチンゲールと薔薇の花(オスカー・ワイルド/朗読付)、魔女の夜宴(ゴヤを描く/朗読付)(2024)＊
梶谷 修／折り(2018)★、風に…波に…鳥に…(2017)★、春のノヴェッラ(2019)、土曜日の森(2022)
加羽沢美濃／左手のための詩曲(2004)
菅野浩和／ソナタ・ノルディカ(2004)
本島由美子／いのちの詩(2009) NPO 法人山形の音楽活動を応援する会・Mプロジェクト受嘱作品
樹原涼子／天空の嵐(2017)、三部作(「弱いときは」「濡れた紫陽花」「標散る」)(2019)
久保 祺／左手の折り(2018)、月影譚(2024)、花たんご(朗読付)(2025)＊
Y.ゴットリボヴィチ／舞踏組曲「Hey How's it going」(2015) 松崎良太氏による助成作品
熊本康平／印象・柳川～The stories of Yanagawa～(2024) 柳川市による受嘱作品
coba／記憶樹(2008)＊★
近藤浩平／海とカルスト、海辺の雪 Op.122(2012)★、ピアノ・ソナタ「高層湿原の旅」(2013)＊
塩見尤枝子／架空庭園 第一番(2009)、第二番、第三番(2012)
シサスク／エイヴェレの星たち Op.142(2012-2013)＊
R.シュタール／ピアノ・ソナタ(2018)＊
末吉保雄／土の歌・風の声(2006)★、いっぱいのこどもたち～左手のためのピアノ/小朋楽曲集(2008)＊★
竹内 淳／セヴラックへのオマージュ～左手のための(2023)
谷川賢作／スケッチ・オブ・ジャズ(2006)★、組曲「そして船はいく」(2023)＊
塚本一実／母に捧げる子守唄(2015)★、天空飛翔(2017)
月足さおり／雫(2016)★、風の影(2019)★
J.ティエンソー／Egeiro/復活(2013)＊
内藤正彦／哀歌(2016)★
新実徳英／夢の王国 左手のための4つのプレリュード(2020)＊★
P.H.ノルドグレン／小泉八雲の「怪談」によせるバラードⅡ「振袖火事」「薔立の女」「忠五郎の話」(2004)★
林 光／花の図鑑・前楽曲集(2005)★
原田 節／Rejoice(リジョイス)(2012)
平野一郎／微笑/樹～円空二嶺へル十一面(2012)＊★、「鬼の生活～左手のピアノで綴る野帳(フィールド/オト)～(2021)＊
T.マグヌッソン／ピアノ・ソナタ(2009)＊、組曲「アイスランドの風景」(2013)＊★
松平頼暁／トランスフォーメーション～左手のための(2012)
間宮芳生／風のあるし・オフフェルトリウム(2004)★
光永浩一郎／サムライ(2012)★、サムライⅡ、ちきゅうといっしょに(2016)★、組曲「オルフェウスの涙」全5曲(2016)＊、
 苦海浄土によせる(2020)＊、組曲「目八羅」第5集
Haruki MINO／左手の為の“もうひとつのミロンガ”(2021)
三宅標名／思い出せなかったこと(2012)＊
村田昌己／時のはざま(2019)★
八木幸三／泡盛オン・ザ・ロック(2016)、「雪原」と「コロボックル」(2017)＊
吉松 隆／タピオラ幻想(2005)★、アイラ抒情曲集(2006)★、ゴージュ舞曲集(2006)★、遊びをせんとや～夢詠み～友愛～海鳴り
 NHK大河ドラマ「平清盛」より(2012)、金魚によせる2つの雨の歌(2018)＊
C.ライト／アメリカのための組曲(2009)＊

3手連弾作手連弾作品

P.エスカンデ／音の絵～爬虫類・夢想・孤独・空の青(2011)＊★
末吉保雄(編曲)／「休憩の日々から」(セヴラック)(2008)
吉松 隆／子守歌(2004)★、4つの小さな夢の歌(2006)★
吉松 隆(編曲)／3つの子守歌(シューベルト～プラームス～モーツァルト)(2006)
C.ライト／折り(2009)＊

ピアノとヴァイオリン&ヴィオラ&チェロ作品

P.エスカンデ／ソナティナ～ヴァイオリンとピアノ(2011)＊、グラフィティ・エリア～ヴァイオリンとピアノ(2022)＊
Y.ゴットリボヴィチ／ヴィオラ・ソナタ(2015)＊

coba／Tokyo Cabaret～チェロとピアノ(2013)＊
近藤浩平／ヴァイオリンとピアノのために(2015)＊、音楽に集う～ヴァイオリンとピアノ(2023)
塩見尤枝子／ソリトン 薄明の大気の中で～ヴァイオリンとピアノ(2013)＊
塚本一実／PNEUMA～ヴァイオリンとピアノ(2019)＊
谷川賢作／スケッチ・オブ・ジャズ2～ヴァイオリンとピアノ(2012)＊★、スケッチ・オブ・ジャズ3～ヴィオラとピアノ(2018)＊
時鷹／ヴァイオリン・ソナタ「北政風」～ヴァイオリンとピアノ(2012)＊
平野一郎／精霊の海～小泉八雲の夢に拠る～ヴァイオリンとピアノ(2011)＊
T.マグヌッソン／チェロ・ソナタ(2013)＊、オルマルの狂詩曲～ヴァイオリンとピアノ(2022)＊
松平頼暁／Incarnation～チェロとピアノ(2013)＊

ピアノと木管と金管楽器作品

P.エスカンデ／チェスの対局～クラリネットとピアノ(2012)＊
coba／樹内祭～左手ピアノとフルートのために(2018)＊
塚本一実／想い出～左手のピアニストとトロンボーンのために～Ⅰ.お別れ Ⅱ.出会い(2017)＊
光永浩一郎／オーボエ・ソナタ(2016)＊、ちきゅうといっしょに～オーボエとピアノ(2016)

その他の室内楽作品

カレヴィ・アホ／ピアノ/五重奏(2020)＊
P.エスカンデ／奔放なカプリッチョ～左手ピアノと管楽器のために(2023)＊
久保 祺／ヴァイオリンとピアノのための5つの小品(2019)＊
coba／尺八と左手ピアノのための組曲(2017)＊
塩見尤枝子／アステリスクの肖像～ピアノとヴォーカルのための(2012)＊
末吉保雄／四重奏曲「アイヌ断章」～左手ピアノ、フルート、コントラバス、打楽器のために(2010)＊
塚本一実／うむかじ～首里節をベースにして(左手ピアノと歌三線による)(2024)
平野一郎／鬼の学校～左手のピアノと弦楽の為の教育的五重奏(2022)＊、水夢譚～洋琴・笙・尺八・胡弓・琵琶・箏と打物に依るヤボネシア山水譚(2024)＊
光永浩一郎／音楽劇 生月島の伝説～ピアノと朗読(2015)
吉松 隆／組曲「優しき玩具たち」～左手ピアノ、クラリネット、トランペット、ヴァイオリン、チェロのために(2010)＊、
 KENJI～宮澤賢治によせる～ピアノとチェロと朗読(2015)＊、KENJI～宮澤賢治によせる～ピアノと朗読(2016)＊

ピアノとオーケストラ作品

池辺晋一郎／ピアノ協奏曲第3番「西風に寄せて～左手のために」(2013)＊
一柳 慧／ピアノ協奏曲第5番「フィンランド」(2012)
P.エスカンデ／ピアノ協奏曲「ANTIPODAS」(2014)＊
P.エスカンデ／アヴェ・フェニックス～金管楽器と左手ピアノのために(2018)＊
近藤浩平／ピアノ協奏曲(2016)＊
U.シサスク／ピアノ協奏曲「Quasars」(2015)＊
R.シュタール／Fantastic Dances(2016)＊
末吉保雄／「複5日に」～重増昇生誕100年記念音楽祭委嘱作品(2013)
 塚本一実／天界飛翔～左手のために(2015)
P. H.ノルドグレン／左手のためのピアノ協奏曲 Op.129～小泉八雲の「怪談」(死体にまたがった男)による(2005)
平野一郎／二重協奏曲「星達/夜」～ピアノ(左手)、ヴァイオリンと小オーケストラの為の、～宮澤賢治/心象/木霊(2016)＊
光永浩一郎／泉のコンセール(2017)
吉松 隆／ピアノ協奏曲「ケフェウス・ノート」(2007) Op.102＊、
 NHK大河ドラマ「平清盛」大河ドラマ「平清盛」テーマ曲～遊びをせんとや～友愛～夢詠(2012)

組曲作品

梶谷 修(編曲) 山田耕祐／赤とんぼ(2016)★
時鷹(編曲) ピアソラ／アディオス・ノニノ、オブリビオン、天使のミロンガ、天使の死(2011)＊、ピアソラ／ブエノスアイレスの夏、
 アヴェ・マリア、悪魔のロマンス、歌～ピアノとヴァイオリン(2011)＊
光永浩一郎(編曲) かもめの水兵さん(2017)★、ビル・エヴァンス／デビーへのワルツ(2017)、エルメート・パスコアール／ベベ(2017)、
 セロニアス・モンク／ラウンド・ミッドナイト(2017)、アストル・ピアソラ／忘却(2017)、ラダムス・ニャタリ／Amargura(ブラジルの魂)(2017)、
 アニヴァル・サルジーニャ／懐かしい人々(2017)、フォーレ／夢のあとに～ピアノとヴァイオリン、セヴラック／大地の歌～七つの農事詩より(2022)、
 モーツァルト／女ほど素敵なものはない～ピアノとチェロ(2022)、モーツァルト／デュボールのメヌエットによる室楽曲～ピアノとチェロ(2022)
宮下秀樹(編曲)モーツァルト／アヴェ・ヴェルム・コルプス(2017)★
吉松 隆(編曲)3つの聖歌～カッチーニとシューベルトのアヴェ・マリア、シベリウス /フィンランディア(2006)★、メリカント／カンガサラの夏の日(2013)＊、
 シベリウス／組曲「カレリア」よりマーチ(2010)(ピアノと室内楽)＊、ラフマニノフ／ヴォカリーズ(2015)＊

ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】へ、多くの皆様からお気持ちをお寄せいただきましたことに、
心より感謝申し上げます。

これからも引き続き変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いします。



アーティストサポートの詳細は
こちらをご覧ください。

◆◆◆◆ 2025年度ご支援いただいた皆さま ◆◆◆◆

< 館野泉バースデープロジェクト「みんなで祝おう! 卒寿記念コンサート」 >

池戸 眞理子 一柳 吉子 稲垣 美晴 えこ 上原 洋子 植村 月枝 岡村 茉莉奈
木全 恵美子 CATHERINE CATES 久間 和子 坂井 和 佐々木 暁子 澤井 みのり
スオミ・ピアノ・スクール研究会 鈴木 早苗 高橋 理都子 田邊 英利子 照井 はるみ K.T.
中村 康江 橋本 利明 服部 喜恵子 林 幸仁 原田 君代 平山 美由紀 福田 誠 藤澤 ふさ子
真野 美千代 丸山 康 安田 牧子 湯本 早百合

館野泉ファンクラブ 館野泉ファンクラブ九州 館野泉ファンクラブ北海道 タピオラの会
(匿名希望4名)

【法人サポーター】

ミサワホーム株式会社 日本フェルト株式会社
AGCグラスプロダクツ株式会社 三和シャッター工業株式会社 株式会社スルガ
DAIKEN株式会社 ニチハ株式会社 株式会社 LIXIL
エイベックス・クラシックス・インターナショナル株式会社 株式会社オクタヴィア・レコード ヤマハ株式会社

< 年間サポート >

【個人サポーター】

朝妻 幸雄 M.I. 岩村 和央 K.U. 上村 憲裕 榎本 英二 Y.E. K.O. 大原 志津子 片山 由美子 K.K. 神田 尚子
北村 眞 小林 真希子 R.K. 相良 延利 新貝 康司 鈴木 忠明 M.T. R.T. 武田 健二 伊達 朱実 田中 治郎
東條 Lilly K.T. ツルレーラブ 真智子 吉米地 英人 K.N. E.N. 児子 弥生 S.N. 長谷川 智子 T.H. 樋口 美枝子
M.H. 平山 美由紀 藤野 盾臣 細沼 康子 M.H. 松尾 芳樹 E.M. K.M. 真野 美千代 三木谷 晴子
安田 牧子 山川 和子 山崎 明日香 横谷 雅子 (匿名希望15名)

【法人サポーター】

三和プリンティング株式会社 株式会社青林堂 三井住友カード株式会社 ロイヤルリゾート株式会社
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント きづきアセット株式会社 株式会社ロジックアンドエモーション ライフプラン株式会社

< ウィン少年合唱団 オフタイム・サポート >

石坂 雅美 K.I. K.K. Y.K. 佐久間 隆弥 Rimiko N.S. 竹内 麻里子 中尾 圭吾 T.H. 樋口 美枝子
K.F. 細沼 康子 M.H. M.M. 水足 久美子 水足 秀一郎 ロロコミ (匿名希望11名)

< ウィン少年合唱団 ツアー・サポート >

江田 明子 T.O. K.K. 佐久間 隆弥 Rimiko 竹内 麻里子 M.T. 平山 美由紀 細沼 康子 M.M.
柳瀬 美佐子 ロロコミ (匿名希望9名)

< 千住真理子に「花を贈ろう!」プロジェクト >

石坂 雅美 北村 眞 城戸 健二 桑原 仁志 小森 桂子 佐藤 亨 田中 治郎 H.H. 道又 利
村上 晃彦 横田 邦子 (匿名希望7名)

お知らせ

現在2025年度年間サポートを受付中です。詳細は、ジャパン・アーツの公式WEBサイトおよび公演チラシ込みの申込用紙等をご覧ください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 TEL.03-3499-7720

(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

2025年10月23日現在 (敬称略)